

46年度と比較して正答率が下がった問題を各領域ごとにみると、次のようになる。

領 域	小問の数	下がった問題数	%
① 書く(文字)	28	7	25%
② 読む(文章)	27	5	18%
③ 読む(文字)	18	2	11%
④ 読む(語句)	24	9	38%
⑤ 書く(語句)	10	2	20%
⑥ 書く(文・文章)	13	4	31%

これをみると、読む(語句)、書く(文・文章)書く(文字)の順で、下がっている。

① 書く(文字)

この領域で正答率が下がっているのは、7問である。このうち、正答が、50%を割っている問題を中心に考察していくことにする。

(1) 漢字を正しく書く

① 「態度」の「態」を書く問題の誤答傾向は次のようになっている。

「能」と書いたものが、最も多く、次が無答、ほかに、熊、帯、体、対、根、休などの誤りがみられた。

② 「招く」

無答が大部分であるが、捨く、詔く、直く、推く、捨く、廻く、昭く、打へんのみなどの誤りがある。

③ 「券」

これは、半分以上が、刀と書くべきところを、力と書いている誤りである。ほかに巻、券、険、拳とまちがっていた。

④ 「除く」

無答が多い。ほかに、覧く、臨く、捨く、捨く、省く、捺く、除く、陰く、などの誤りがある。

⑤ 「複雑」の複

これは、書きわけることができないで、「復」と誤ったものが多い。ほかに、福、腹、副、複、復、窺、などとまちがっている。

以上、漢字を書くことについての誤りは、次の三つにまとめることができる。

- 音や訓の同じものをあてること。
- 形の似た字をあてること。
- その漢字の一部を書いたり、よけいなものをつけ足したりすること。

これは、漢字を注意深く見させること、よみをしっかり覚えさせること。表意文字であることをよく理解させることが大切である。なお、光村教科書によると、態→初出、5年、15回券→初出、5年、3回 除く→初出、5年、4回 複→初出、5年、18回 つまり、券は、6年までに3回しかでてこない字である。これを見ると、読解の時、教科書に出て来た時だけ指導しても、記憶させるのは容易でないとと思われる。とり立てての指導が考えられねばならない。

② 読む(文章)

小問、27のうち、下まわっているのは、5問である。正答率が、50%に達しない2問について考えてみたい。

(1) 文・文章の続き方がわかる(六、2イ)

誤答50問について調べたところ、ア→45% ウ→7% エ→48% となっている。(イが正解)これは、「おかあさんは」という主語をきちんと、とらえ「どうした」の述語をとらえることを第一に考えればよいのであるが、主語と述語の間に、語が多いので、まどわされてしまうらしい。エ、としたものが多いが、「弟が……弟はおかあさんに」とって、くりかえしがあり、ずっと続かないことを、感覚的に気づくようにさせたいものである。ふだん一つ一つの文を読ませる指導を大切にすべきであろう。

(2) 場面や事物・心情を読みとる。(十、1)

具体的には、「土間に燈がもれて」の意味がわかればよいわけである。そのためには、「土間」「燈」「もれる」のさし示す事柄が読みとらなければならない。そして、詩の前後の文と関連させて、様子を思いうかべることになる。